

現代日本小説大系

48

昭和

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第四十八卷

河出書房版

現日小本大系 第四十八卷

昭和二十四年十二月十五日 初版發行
昭和二十七年十二月二十日 再版發行

定價 貳百參拾圓
地方定價 貳百四拾圓

著者代表

中野重治

發行者

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
河出孝雄

編集者

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會
荒正人

印刷者

東京都文京區戶崎町七十一番地
小泉輝章

發行所

東京都千代田區株式會社
神田小川町三ノ八

河出書房

電話 神田四三一七四番

目次

中野重治

空想家とシナリオ

三

島木健作

癩

六

黎

明

一〇三

高見順

故舊忘れ得べき

一三

武田麟太郎

銀座八丁

二五

解説(荒正人)

三五

中野重治

空想家とシナリオ

車善六は空想家である。たとへば彼は、自分の名が車善六であることについてさへ空想を逞しくする。それは昔、車善七といふ非人頭がゐたからである。つまり彼は、自分が車善七の弟か何かであるやうな氣にふらふらとなる事があるのである。無論誰にしろ、自分の名が車善六で、昔有名な車善七といふ非人頭がゐたとすれば、善七と善六とを結びつけて考へるぐらゐはするに違ひない。しかし善六の場合は、もう一步進むのであつて、つまり彼は、車善七は偉大な人間だつたと空想するのである。車善七が馬鹿な人間でなかつたことは確かに違ひないが、偉大な人間だつたかどうかについては問題があらう。ただ善六は、そんな問題には頓着せぬのである。善七は自ら非人であり、かつ最初の非人頭であつた。従つて彼は、偉大だつたのである。したがつて善六にも、何か非人のやうな、また非人頭のやうな偉大さがなければならぬ。非人といへば下級の人間である。下づみの人間である。従つて善六の偉大さも、下級の人間、下づみの人間としての偉大さでなければならぬ。まして善六自身下づみの人間の一人である。従つて……と、さういふ風に彼はごく自然にひとり感じてしまふのである。

無論彼は、自分の車といふ姓が善七に全く無關係なことをよく知つてゐる。彼の家は代々百姓で、百姓でないのは

家系の上で彼が最初のことであり、車といふ姓なども、明治維新になつて初めて急ごしらへで出来たのである。とにかくその時は寄合ひが開かれた。さうして百姓一統めいめい苗字を持つことになつたが、根が百姓だから、苗字をきめるについて系圖などといふ據りどころがない。萬右衛門といふ百姓がゐて、これは少々うす馬鹿であつた。さうして、舌が長いかしてしよつちゆう舌を垂らしてゐた。その萬右衛門が、いろいろに思案をしても何と苗字をつけていいか分らない。そこで彼は、寄合ひの席で村の衆に相談をかけたのである。するとそこに智慧者がゐて、「それは平野としたがよからう。」といつて平野萬右衛門といふことになつたのである。ではなぜ平野かといふと、それはその地方で舌のことを「ひら」とか「へら」とかいつてゐたからに過ぎない。平野萬右衛門とは、舌の萬右衛門、舌出しの萬右衛門といふことであつた。それから定吉といふ百姓もゐた。もと彼は加賀藩の百姓であつた。ところがひどい貧乏をして、村を脱走してしまつた。さうしてどんだん夜逃げをして來て、この村まで來て落ちついたのであつたが、それだから特に貧乏で、食ふや食はず、水のみ百姓の最下級、乞食に毛の生えたやうな境涯であつた。そこでその定吉が、夜逃げを加賀藩からして來たといふので前田と苗字をつけたのである。こんなわけで、善六の先祖も車といふ

苗字にきめた。それはその先祖が、手先きが器用で、百姓のつかふ簡単な車なぞを暇々につくつてゐたからである。さういふことを善六はよく知つてゐる。知つてゐるけれども頓着せぬのである。

彼はもう三十になつてゐる。さうして東京市のある區役所に勤めてゐる。彼の仕事は戸籍係り關係である。具體的にいふと、彼は毎日々々戸籍謄本とか抄本とかいふものを書きつめに書いてゐるのである。仕事は簡單である。臺帳にあるのを新しい紙に寫しさへすればいい。間違ひをやれば、それを消して「何字消し」と欄外へ書いて印を捺せば、すむ。何らの創造の苦痛もない。しかし善六に取つては、仕事に何らの創造の苦痛もないといふことが大きな苦痛なのである。もうすこし苦痛のある仕事をしたい。その苦痛が自分のよるこびとなつて酬いられるやうな仕甲斐のある仕事をしたい。ただ現在のところ、彼の手のとどく範圍には、さういふ仕事がないのである。

そこで彼は、せつせと戸籍謄本を書きながら、お客に對して出来るだけ親切であるやうに力めてゐる。お客のなかには随分もの知らぬものがあつて、といふよりも、むしろ知らぬものの方が大部分で、たとへば最初に男の子が生まれ、つぎに女の子が生まれた場合、男の子が長男であることは分つてゐるが、女の子が長女なのか次女なのかは分ら

ぬといふ人が少くない。そこで彼は、さういふ人達に、例まで引いて親切に説明するのである。この親切な説明といふことが、今では善六のあぢ氣ない毎日のなかのオアシスのやうなものとさへなつてゐる。そのため一文の得もあるわけではないが、彼の説明がすらすらと相手にのみ込まれて行くのが彼には嬉しい。その短い嬉しさが彼には楽しいのである。

だから彼は、大抵の人ならば代書屋で書いて貰へといつてつつ放すやうなところでも、代書屋へ十錢なり二十錢なりを支拂はずにすむやう親切に取りはからつてやる。殊に相手があまり豊かでもないやうに見える場合にさういふ手續きを教へてやる。善七の弟分のやうな氣が時々してゐる手前、ごく自然にさうなるのである。

毎日ある時刻が來ると、彼は、鐵筆の下のカーボン紙をずらしながら、手頭のしびれ鹽梅からおよそ何通ぐらゐる今日は仕上げたかをぼんやりと頭で計算する。すると彼は、殆どその度ごとのやうに、かういふ、彼のいはゆる創造の苦痛に伴はれぬ手頭のしびれといふものが、法律の言葉、法律で定められた「書式」といふものに關係があるやうに思へて來て仕方がない。「身代限又ハ家資分散若クハ破産ノ宣告ヲ受ケタルコトノ有無」、「公權ヲ剝奪セラレタルコト及ビ

公權停止中ノ有無、「右御證明被成下度此段奉願候也 年月日姓名 印」——かういふ身分證明願を今日も彼は取り扱つたが——そしてそれは、本當は彼の仕事ではなかつた。ここでは、一體何のためにこんなに次ぎから次ぎへと戸籍謄本や抄本が要るのかと思はれるほどその註文が多くつて、普通彼は、朝から晩までそればかりを寫してゐるのである。ただ今日は、彼の同僚が忙しすぎたので、その分をちよつと手傳つてやつたのである。——證明書を受けとつて歸つて行つた本人が「身代限」は分つてゐたらしかつたが、「家資分散」が分つてゐたかどうか「禁治産」や「準禁治産」の意味内容を十分知つてゐたかどうか、「公權ノ剝奪」と「公權停止中」との辨別をどこまでわきまへて歸つたものか、親切な善六にさへすこぶる心もとなかつた。彼は親切に説明しようとしたのであつたが、相手は、そんなことはどうでもかまはぬといふ顔つきでさつさとして行つてしまつたのである。しかも善六の見たところでは、相手は恐らくそれらを分つてはゐなかつた。ただ證明書さへ手に入れば、差し當つての彼の目的は達せられるからといふ風であつた。しかし本當のところ、そんな考へでゐたために飛んでもない損をしたりすることもあるではないか? 「書式」そのものはあくまでも嚴重でなければならぬが、何とかもう少し簡單で分りやすくはならぬものか? さうすれ

ば、一々何でも役場へ訊きに來なくてもすみ、善六としても、毎日々々判子で捺したやうな仕事ばかりしてゐなくてもすむだらう。同じ手頭が痺れるにしても、今少し、彼のはゆる創造の苦痛に伴はれた仕事が出来ようといふものではないか?

そんな風に彼は考へてゐたから、ある土曜の午後、彼のつちおいて隣りのやや上級の同僚のところへ、一人の西洋婦人があらはれた時には、善六は殆ど羨しさをさへ感じたのである。

その時彼は、一心にいつもの寫しものをしてゐた。その日は特にその仕事に忙しかつた。例によつて彼は手頭のしびれを感じはじめてゐたが、あまりに仕事に忙しいため、今日に限つて、およそ何通ぐらゐる今日は仕上げたかといふ例の頭のなかでの計算をつい忘れてゐたほどであつた。その最中に彼は、一種奇妙な發音の、ここの役場で決して聞いたことのない言葉がいはれるのを聞いたのである。

「コンニチハ!」

思はず善六は顔を上げた。するとそれは西洋人の、しかも若い女であつた。洋服を着て帽子をかぶり、帽子の下から金髪がのぞけてゐる。さうして彼女は、さういふ子供のやうな調子の日本語をいつてから「相手の顔へにつこりと笑つたのである。思はず相手も、「はい。こんにちは。」と

笑ひ顔になりながら答へるのを善六は見つた。

「わたし……」と今度は西洋婦人がいつた。

それから彼女は、何か外國語で「ごこといひ出したが、善六も、單語の二つや三つは外國語を知つてゐる、どうやらその婦人は、ドイツ語で喋つてゐるらしいのである。してみれば、相手をしてゐるその同僚も、とにかく喋れる程度にはドイツ語が分るのに違ひない。

しかしそれからあとは、何の話かといふことは善六には聞き取れなかつた。彼は全然失禮にあたるといふ氣がしない氣樂さでその場の光景を眺めてゐた。全くこんなことは、めつたにない、またこんな役場には似合はしからぬといはれても仕方のない出来事であつた。大分前にも一人西洋人が來たことがあつたが、それは若い白系ロシア人の男で、驚くほどうまい日本語でべらべらと喋つて行つた。その時もそれは、今西洋婦人の相手をしてゐる男のところへ來たのであつたが、用事がすんだあとでその男が、「あなた、ずるぶん日本語がうまいですね。」といふと、相手のロシア人は、「いえ、なに……」といつて「えへムムム……」と續けて笑つた。その「いえ、なに……えへムムム」といふのが、田舎者の善六などには眞似も出来さうにない巧みな東京辯なので、聞いてゐた役場の連中一同、思はず顔を見合はせたことであつた。

ところがそれから一と月ほどあと、別の同僚が晝休みの時間に、「さうさう……」といつてこんなことを報告したのであつた。

「あれや君、大變な喰はせものだつたよ。あいつ、テキ屋なんだよ。ゆんべ戸塚の縁日へ行つたらね、そしたらあいつ、おしめ干しを賣つてゐるんだ。一べんに十六枚とか干せるつて奴さ。丸ごとテキ屋なんだよ。ちよいとうつ向き加減か何かでね。しやがれ聲でやつてたよ。青い開襟シャツを着て……おれが覗いてみるとね、ズボンで膝までまくり上げて、板裏をはいてやがつた。」

「日本語しきや喋れないんぢやないか？」
「さうらしいんだよ。」

その時のをかしさを思ひ出しながら善六は眺めてゐたのである。しかし二人の話はさつぱり分らない。たまに一つぐらゐ分つた單語から空想を組立ててみるが、組立てが終らぬうちにずんずん話が進むらしいため、さすがの空想家も空想の上で追ひつゝことが出来ない。ただその婦人は、にこにこしたかと思ふと急にきつい顔になることがある。それが、彼女の言葉が相手にのみ込めたかどうか検査をしてゐるといつた様子である。善六は「西洋の女といふものは随分きつい顔をするもんだなア。」と思ひ、「とても俺には眞似が出来ぬわい！」と考へる。善六は、特別の場合以外

絶対に他人にきつい顔の出来ぬ男である。相手がきめつけてでも来れば反射的にきつい顔にもなるが、こちらからきつい顔をして相手に對することは細君に對して以外はない。

「あの……」とその時呼びかけられたので善六は顔を元へ戻した。それは、さつきから彼の書きあげる戸籍謄本を待つてゐた男で、その男もやはり西洋婦人の方を面白うに眺めてゐたが、善六同様話が分らず、急に自分の用事を思ひ出して善六へ呼びかけたといふ顔であつた。善六は、あわてて謄本をつくり終へてその男にわたしたのである。

それから一時間ほどすると役場の仕事が終わつた。彼は洗つて干してあつた重箱の辨當箱を風呂敷に包むと、役場を出てぶらぶらと驛の方へ歩いて行つた。驛までは四町ぐらゐしかない。大抵の人はこの四町ばかりをとつとつと急いで歩いて行くが、善六は他の少數の人の組になつて、いつでもぶらぶらと歩いて行くのである。細君が彼を待つてゐるには違ひないが、どうしても彼は急いで歸る氣がせぬのである。三十歳の男一匹が、一日朝からカーボン紙の上にかがみこみ續けて來て、そこで鐘が鳴つたからといふので辨當がらを提げてとつとつと歸つて行くのでは、それこそ正真正正のアカーキイ・アカーキニヴィッチ・バシマチキンではないか？ したがつて、創造的苦痛の伴ふやうな仕

事を求めてゐる善六は、この四町ばかりの間を出来るだけぶらぶらと歩いて行つて、一文の得にもならぬやうなことばかりをつぎからつぎへと空想しつづけるのである。僅かの道のりだから空想が幾らも發展しないことも多い。しかしまたこれは夢のやうなもので、僅かの時間のうちに厖大な空想を組立て終ることも決して稀しくはない。土曜日で割合に早く退けたため、午後といつても街上は殆ど眞晝のやうに明るい。いきほひ彼は、彼等の眼を見張らせたさつきの西洋婦人について空想を逞しくしたのである。

あとで聞いたところによると、その婦人は日本人の男と結婚してゐるのである。子供までもあるのである。ところがその日本人である夫が、何かの犯罪の嫌疑で刑務所にはいつてゐるのである。そこでその婦人が生計に困つて來た。ところがその女には、故國に受けつぐべき若干の財産が残つてゐる。彼女が受取人ということに法律上もなつてゐるが、この受取り權利を行使することなしに彼女は日本へ來てしまつたのである。そこでそれを是非早く受けとりたく思ふ。ところが日本の法律では、女は無能力者であつて何かを受けるといふことが出来ない。妻のものでも實際は夫が受けとるのである。ところが現在夫は刑務所にはいつてゐて、この受取りの仕事を自分直接にやる事が出来ない。そこで妻が夫の同意を得て、あるひは委任である

かも知れないが、早くその財産を受けとりたいといふのである。ドイツと日本とは法律上の女の地位が違ふといふことが問題を面倒にしたのである。結局それは、役場だけでは埒があかぬといふことになり、領事館かどこかへも出かけねばならぬといふことになつて一と先づケリがついた。そして善六たちは、相手をした同僚から Vollmacht といふドイツ語を教はつたのである。

この話はかなり強く善六の空想癖を刺戟した。ドイツの女は、結婚して子を生むとみな肥つて來ると聞いてゐたがあの女は瘦せてゐた。それは亭主が刑務所へ入れられてゐるといふ原因だらうか？一體、その亭主といふものは何ものなのだらうか？亭主もどれだけの期間は妻と一しよにゐたに違ひないが、かういふ夫婦は日常どんな暮らし方をしてゐるのだらうか？彼女にしても夫に面會にゆくに違ひないが、さつきの調子の日本語でどれだけのことが話せるものか？何でも面會所では、刑務所の巡査（？）が側で書取りをしてゐるといふが、さういふ巡査にドイツ語が分るかどうか？それとも通譯がつくのか？それとも刑務所の上級官吏は法學士に違ひないから、さういふ上級官吏の一人が、好奇心も手傳つて自分から書取り役を買つてでも出るのだらうか？さうだとすれば、彼は歸つてからその日の模様を面白をかしく細君に話すに違ひないが

……とにかく、かういふ相手にぶつかることは、多少とも創造的性質のまじつた仕事といはねばならぬ。

改札口でバスを振つてみせながらさへ彼は空想をつづけてゐたが、電車が來て乗りこんだ時にはさすがに彼の空想もけし飛んでしまつてゐた。例によつて例の如く、あまりに人がこむのである。ラッシュアワーに花を忘れたといふ流行歌があつたが、實際のラッシュアワーには、善六のやうな男どもは花を忘れるどころの騒ぎではない。蒸しあつさ、人臭さ、風呂敷にしみついた辨當の匂ひなどの入りみだれて眼眩むばかりである。さうして善六は、例によつて例の如くに立つてゐなければならぬ。彼には、こみ合ふ電車のなかで平氣のへいざで腰をかけてゐることが出來ない。まして、腰かけてゐる自分の方へ婆さんなぞが近づいて來ると、そばまで來ぬうちにそうつと反對の方向へ眼を向けてゐるといふやうな器用な藝當はたうてい出來ない。おまけに今日は、車が動き出した途端に、善六の右足の親指がぎりつと踏まれたのである。彼は洋服を持つてゐたが、洗濯が出來あがつてゐないので昨日から着物で通つてゐる。そのセルの裾から出てゐる下駄の上の親指が、すれすれに立つてゐるとこかの男の靴の踵で、ちやうど爪一ぱいにぎりつと踏まれたのである。

善六ははつとした。同時に男は後ろを向いた。向いたと

いつても善六の顔を見たのではない。踵の感じを確かめるためかのやうに、自分の靴の後ろのところにひよいと見たのである。いはば男の顔は、善六の胸のところでねぢられながら下を見た。その瞬間、靴の踵は完全に爪にかぶさつてゐたのである。當然善六は、その男が何分の挨拶をすることと思つた。ひどくは痛まなかつたせゐもあるが、男自身あまりに明瞭に現場を見てゐるので、一種の禮儀作法的な自然な氣持ちから、その男の背中を思はず押すとか、「いちちち……」といふやうなことを叫ぶとかせずに済んだことが彼には却つて安心できる氣持ちであつた。すべては一瞬の出来事であつた。男は元へ向いた。そして何一つ挨拶をいはなかつたのである。

善六は少し癪に障つて來たので、男の顔を斜め後横から覗くやうにして見たが顔色は分らなかつた。とにかく男は、口髭を立てた四十二三の丸帽の男である。丸帽には黒のモールが捲いてある。善六は、腰を下げ氣味にしてなほそうつと覗いてみたが短剣なぞは下げてゐない。してみれば男は海軍士官ではない。何にしても、たしかに男は、何とか一と言ふべきあの瞬間を失つたのに違ひないと善六には思はれた。

「それにしても」と善六はしかし考へた、「おくれたにしても何とかいつたらどうだ？」

ふと善六は、男が次ぎの驛で降りるのではないかと考へた。しかし、電車が停つた時には男は動かなくなつた。今や善六には、男の降りるべき驛が幾つ目かといふことは忘れられてしまつて、この男が幾つ停車場を我慢するだらうかといふことが興味になつて來た。二つ目でも三つ目でも男は動かなくなつた。だが三つ目を過ぎると、男はこそこそとポケットからハンケチを引き出して頬をふきはじめた。それから片手で帽子の庇をあげて、しきりに額をふきこすり始めた。どうやらその額は、いつも帽子をかぶつてゐるため兵隊のやうに白いのらしい。さうして、善六の鼻息のかかるほどのところでこすられてゐるその額は、拭いても拭いても脂汗がにじみ出て來るのらしい。確かにその男は、ただあの瞬間を失つたに過ぎぬのに違ひなかつた。親指も殆ど痛みを感じなくなつてゐる。善六には、その男がやや氣の毒に、かつ少しユーモラスにさへ見えて來た。その次ぎの驛で男は降りた。彼が帽子をかぶりなほして、背中になほも善六の眼を感じながら、「ああ、ひどい目に逢つた！」といふやうに手を振つて、改札口へのコンクリートの下り坂を一步毎に低くなつて行くのを善六は見送つた。

しかしその次ぎの驛ではまた一つ事件が起つた。といふのは、電車がそろそろ停りさうになつた時、一人の中年の婦人がなかの方から押しわけて來て、善六の後ろに置いて

あつた鞆を——善六は出入口のすぐ傍に立つてゐて、彼の背中は車掌臺の眞鍮バアによりかかつてゐた——引き出さうとしたのである。善六は自分で引き出してやらうかと思つたが、立つてゐるすぐ踵のところなために却つてからだが動かしにくい。それにその婦人は、もう鞆の紐をつかまへてしまつてゐる。そばにまだ二つケースが並んでゐるが、それはその婦人のものではないらしく、婦人は一つだけ鞆を提げると、そのままドアから外へまっ直ぐに足をかけて車室を出かけてゐる。そして婦人は出てしまつた。と彼女は、ブラットホームへ出てしまつたなりの姿勢で振りかへり、片手を車室のなかへ入れ、ドアがしまらぬ中にとせき立ちながら、残つてゐる二つのケースを指さして「それを！」といつたのである。

婦人は決して善六の顔を見てさういつたわけではなかつた。また善六から見れば、人の顔も見ずに今この婦人がしたやうなことをするのは、貴婦人が召使やホテルのボーイやなどに指圖する時の仕方である。しかし善六の手は、いつの間にやら二つのケースを持ちあげてゐた。それは、婦人の指圖を待ち受けてゐる召使が別にゐるのだから、取つてやるのに一番適當なところに善六が立つてゐたせゐであつた。婦人はそれを、いはば手だけで受け取ると、さつきの鞆と三つ並べて一とまづブラットホームに置いた。そ

してドアはごろごろと締まりつつあつた。その時善六は、別の出口から出た一人のやはり中年の婦人が、さつきの婦人の連れらしく追ひつゝやうに彼女に近づくのをドアのガラス越しに認めた。

「ケース出せて？」と追ひつゝいた婦人のいふのが聞えた。

「……………」

何か答へたらしいさつきの婦人の言葉は、ドアが完全に閉ぢられ終つたため善六には聞きとれなかつた。その婦人がこつちを振りかへるだらうと思つて善六は眺めてゐたが、婦人は振りかへらなかつた。電車は發車した。婦人達は連れだつて話しながら、一旦線路を渡つて反對側の改札口へ歩いて行く。善六は、眞鍮バアに一層もたれかかりながら首をまはして車掌臺のガラス戸越しにそちらを見送つた。二人の婦人はそのまま小さくなり、そして改札口を通りぬけるのが一層小さくなりながら善六に見えてそのまま見えなくなつた。

「一たい奴らはおれを何と思つてゐるのか？ このおれ様を……」

足を踏んづけても御免ともいはない。鞆を持ち出させても大きにともしはない。あの創造に伴ふ苦痛などを求めてゐるおれ善六も、あの奴らにはいい加減なお人好しとしか見えぬのであらうか？

しかし善六には別に腹は立たなかつた。彼の眼には、どこかの家の涼しさうな茶の間で、帶を取つてしまつた二人の中年婦人が、お茶などを飲んだあとの有様が浮かんで來た。さつきの婦人が、手を振つて顔の前の空気を一と打ちするなり、「あら、さつきの袍を取つてくれた人にお禮をいはないで來てしまつたよ、あんた！」と叫ぶやうにいつて、全然わる氣のない聲でげらげらと笑ふのである。彼の降りる驛が來たので彼は降りた。

驛から家までの五町ほどの距離、これを善六はやはりぶらぶらと歩いて行つた。この五町ほどの間には心待ちにするものがある。それは途中の表具屋の神さんであつて、善六にいはせると、界限隨一の美人なのである。この美人を見つけた時、彼は早速細君にそのことを知らせた。さうして見せた。すると細君が全く同意したのであつた。美人といつても健康な美人である。せいが高い。眼が小さい。血色が全身的にいい。齒が美しい。聲に曇りがたない。さうして幾分そばかすがある。表具屋といつても掛軸や額などは取り扱はぬらしい。大抵は襖や櫛立である。大きな木の臺のところにその神さんが立つてゐたり坐つてゐたりする。前の八百屋で買物をしてゐることもある。それを見かけける度に善六がじろじろと顔や全身を見るので、今では向うでも氣がついて、その度に「また見てゐるな……」といふ顔

をするが、しかし善六は、相手が決して不快には思つてゐないと一人で決めてゐる。それは彼女が、自分の美しさに自惚れてゐるからではない。恐らく彼女は、自分が美しいといふことさへ全然知らぬのである。それは、彼女の美しさがいはゆる美人の美しさでなくて、健康體の美しさ、若さの美しさ、つましい平和な家庭生活の営みの美しさだからである。彼女にしても、善六があまり度々彼女を見ることにいつて、別に氣持のいい筈はない。疑問にも思つたに違ひない。しかし彼女は、さういふことをあまり氣にかけぬのである。「あれは妙な人だ。いやにじろじろ人を見る。しかし厭やな眼つきでもない。ほら、今日も見た。」そしてそれだけで済んで行くのである。とにかく善六は、自信を以てさう空想してゐる。

しかし今日は、彼は表具屋のある方へは出ずに、別の屋敷町の方から歸つて行つた。この方も中々悪くない。同じ住宅街とはいつても、善六の家のある邊とこの邊とは、雲泥ともいへぬが大した相違である。それらの家々の間を歩きながら、彼は人氣のない垣根の中を覗きこんだり、縁側、庭、芝生、屋敷畑の様子などを窺つたりする。さうして切りに、自分の家のこと、今住んでゐるのではなく、いつか善六が自身のためにつくる筈の家について考へるのである。但し彼は、心に石川啄木の詩を思ひ浮べて、あれと

は違ふのだといふ事をきつぱりと自分にいつて聞かせてゐる。その詩を彼は、少くとも次の行なぞは誦誦することが出来るのである。

場所は鐵道に遠からぬ、

心おきなき故郷の村のはづれに選びてむ。

西洋風の木造のさつぱりとしたひと構へ、

高からずとも、さてまた何の飾りのなくとても

廣き階段とバルコンと明るき書齋……

げにさなり、すわり心地よき椅子も。

しかし彼は、自分の家を東京以外に建てようとは思つてゐない。また西洋風にもつくらうとは思つてゐない。西洋風にも西洋風があらうが、少くともこの邊にあるやうな、應接間を兼ねた書齋と玄關とだけを洋風にしたいやうなのは御免である。彼は出来れば白壁をさへ使ひたいと思つてゐる。彼の今の家の、安漆喰ひで塗りつめた板張り青ベンキ塗りの書齋などは言葉通りたまらぬのである。また彼は、すわり心地のいい椅子なども必ずしも問題にしてゐない。ゲエテは、八十歳になつてはじめて倚りかかちのある椅子をつくつた。さうして、若い時から肘かけ椅子などを使つてゐる人間に何が出来るかと思つた。實は善六は、かうい

ふゲエテにひそかに感心してゐるのである。

ランプの笠の眞白きにそれとなく眼をあつむれば

その家にすむたのしさのまざまざ見ゆる心地して

泣く兒に添乳する妻のひと間の隅のあちら向き、

そを幸ひと口もとにはかなき笑みものほり来る。

さて、その庭は廣くして草の繁るにまかせてむ。

夏ともなれば、夏の雨、おのがじしなる草の葉に

晋立てて降るころよさ。

またその隅にひととの大木を植ゑて、

白塗りの木の腰掛を根に置かむ——

雨降らぬ日は其處に出て、

かの煙濃く、かをりよき埃及煙草ふかしつつ、

四五日おきに送り来る丸善よりの新刊の本の頁を切り

かけて、

食事の知らせあるまでをうつらうつらと過ぐすべく

……………

しかし善六は、彼の庭には鐵棒や木馬や吊し梯子を置かうと思つてゐる。またしつかりとした一段歩ぐらゐの畑をつくらうと思つてゐる。畑は全然實用的でなければならぬ。そこで彼は猛烈に仕事をし、底ぬけに休息するのであ

る。彼はエヂプト煙草などは吸はない。出来れば禁煙したいとさへ思つてゐる。また彼は丸善から四五日おきに本を買はうとも思はない。彼も久しい前はちよくちよく丸善へも出かけ、二階の洋書部の模様なども何となく馴染みであつた。ところがこの頃、用事があつて本を探しにそこへ行つてみたが、まるで様子が變つてしまつて何とも變な具合であつた。本なども、どれだけ減つてゐるかは分らぬが減つてゐる感じである。目的の本が見つからぬので、彼はいろいろに説明して事務員に訊いてみた。するとその本がないばかりか、その本の存在さへ事務員は知つてゐぬらしい。とかうするうちに、彼は自分が、丸善の洋書部なぞといふハイカラなところへはつひぞ來たことのない田舎ものであるかのやうな氣がして來た。書棚の中味も、そこに詰めてある本の中味も、事務員の様子も、ばらつとしたお客も、すべて要するに外國から輸入する本とそれを取りまく人間とが、十年前とはがらりと變つてしまつた取りつく鳥のなさを感じてさうさうに引き上げたのである。

事ごとにゴオリや豚木を引合ひに出して考へることからも分るやうに、かういふ善六は文學青年である。彼の友達にはある種の文學賞を受けたものなどもある。彼自身も短篇小説などを書く。しかし彼の作品で印刷され、しかも稿料がはいつたといふものはめつたにない。あればそれは

短い紹介文、短い註釋文の類である。彼の友達の一部が文學雜誌などの仕事をしてみても、彼のことを心配して時々なさういふ仕事をくれるのである。その場合の彼の収入は、六圓、十圓、十五圓といつたところである。しかしこれは、善六たち夫婦に取つて決して小さい額ではない。戸籍謄本をいくら澤山つくつたところで別に歩増しといふことはない。細君は一心に編物をするけれども、一種特別の神經屋で、なかなか差引き勘定が合つてくれない。編物のことは善六には分らぬが、ある時細君が張りものをしてみるので見て善六も呆れたことがあつた。彼女はその時伸子張りをやつてゐたが、向う側と手前側との針の位置が糸一本分ちがつても針をさし直してゐたのである。

したがつて十五圓もはいつた時の夫婦は大よろこびである。細君は、善六がもつと金になる仕事をしてくれればと考へてゐるが、三十圓以上の仕事があつたことはまだ一度もない。ある友達は流行歌を書かぬかといつてくれた。善六もその積りになつてある歌詞作者に會つた。レコード會社へ賣れば若干の金になり、歌そのものはごくどぎつい雑なものでもいいといふ上に、その歌詞作者自身も昔は良質の文學青年だつたらしく、善六を慰めはげますやうにして色々とそのかしてくれたのである。しかし見本を送つて貰つてよくよく考へた上で、結局善六はその親切な勧誘を